時間はそうないよ

長原武夫

ＪＣＰの仲間として十五年間余、ペンを通してペン友の歩みを知る。私は「私の昭和」が出版され「自分史のため」という一文を書く。受洗三十五年にして熱海を訪れて、学びのスタートを切る。

満江師より東大卒の小幡浩兄を紹介され、同室になり一葉の写真を撮っていただく。八十才で仲間入りし、独立伝道と新聞も発行されていた。最後の参加は、リュックにおむつをという姿であった。正に十字架を背にした主の姿の再現のようで、永遠の生命を得るまでの患難の道をみせられたようである。そして間もなく召された。

満江師は「みんな時間はそうないよ。今こそ書き残せ」と語られていた。そして師も召され、新生ＪＣＰの歩みはスタートを切る。

あかし新書も「苦難」「祈り」「死」「十字架」「希望」「大いなる出会い」のテーマでペン友は書き綴っている。そして今日「患難をこえて」を発刊する。

Ｋ理事は「いつまで生かされるかわからないが……」と語られる。過去を追憶したくな

る心境にかられる。創立五十年余の山をこえて、召された兄姉の一文一文をよみかえしてみる。多くの患難をこえられた足跡がみえていく。みえない信仰に近づく事ができる。

美しい景色、美しい華、成長する生物の姿を、写真に私はする。人は言う「もっとみにくい写真をみつめよ」と。一ミリの視野の限界をみつめて、きびしい写心を切りとってと願っている。

「今日一日の苦労は一日に足れり」

いつしか「私の平成」とのテーマが与えられた時、「平成の一日は長かったけれど新しい今日に私はかける」と書けるだろう。

「時間はないよ」、これこそ「患難をこえて」の唯一の答えと信じて。